

第2図 層位と文化層 (年代は諏訪間 2002 による未較正の AMS 年代値 [yrsBP])

そして石器が密集して出土するような状況では、決定的な分離を行うことは難しく、文化層の認定基準やその妥当性について批判的に検討する必要性を指摘している。以下、本稿では 1990 年の発掘調査報告書を「報告書」、2005 年の再整理報告書を「整理報告書」と表記する。

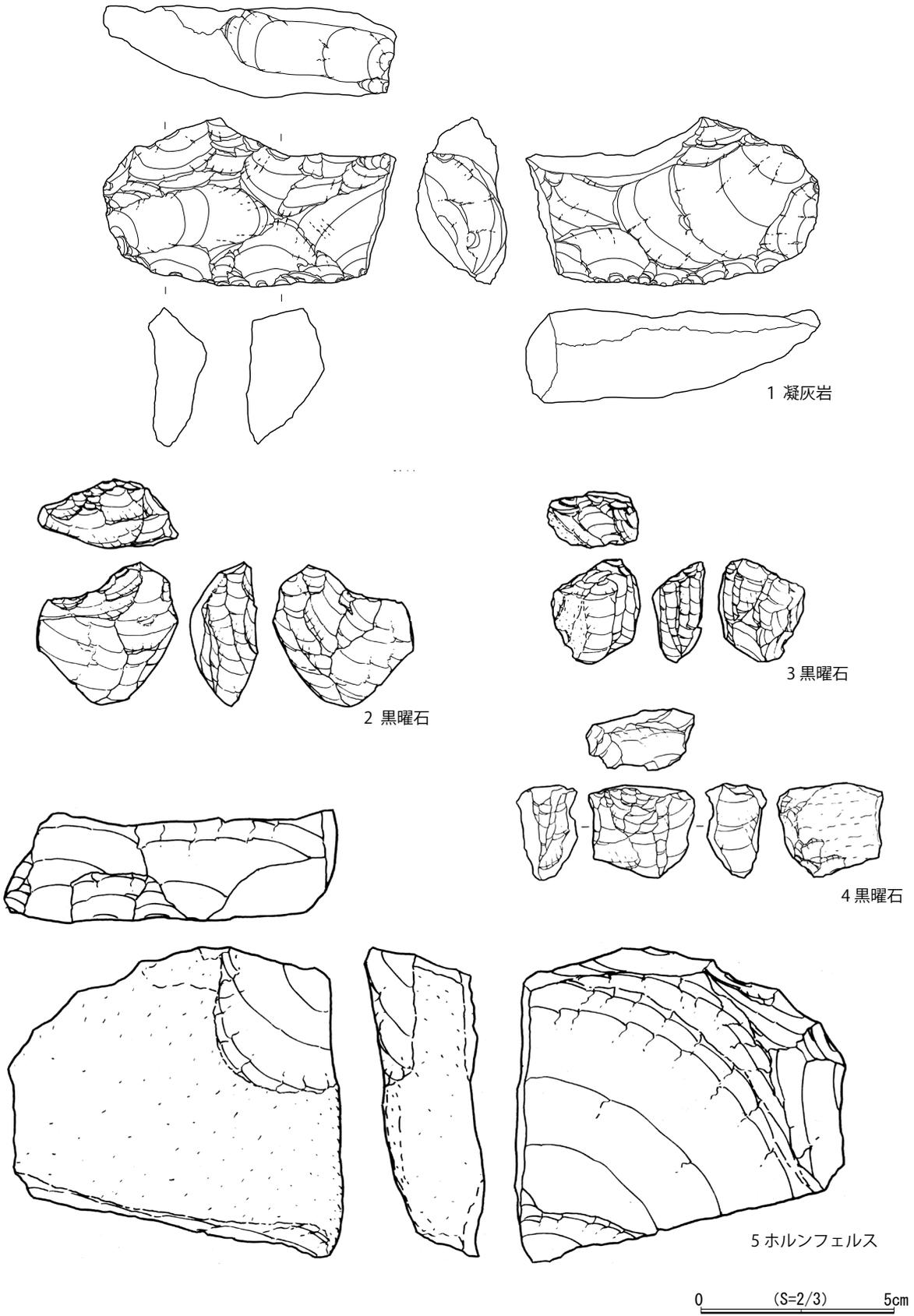
2. 資料の整理作業経過

筆者は当館所蔵の旧石器時代遺跡について、掲載、非掲載を問わず、橋本遺跡、下九沢山谷遺跡、下森鹿島遺跡、古淵 B 遺跡、中村遺跡などの出土品の観察を実施しており、各遺跡の利用石材や各時期の剥片剥離技術を検討していた。その中で、古淵 B 遺跡の報告書および整理報告書を読み込む中で、出現期土器群に該当するであろう尖頭器、石斧に注目し、その形態分類と文化層の様相を検討していた。今回報告する資料は、非掲載資料のうち、珪質頁岩に分類され収蔵されていた。その詳細は後述するが削片系細石刃核と判断し、その重要性を鑑みて、今回資料報告をすることとした。

整理作業は令和 6 年 12 月に実施し、石器実測・トレース・写真撮影を行った。

3. 資料の詳細

第 3 図 1 は報告書、整理報告書非掲載の削片系細石刃核である。石材は凝灰岩であり、全体的に弱い光沢が確認できる。残念なことに注記が消えており、出土層位や原位置が不明である。ここでは削片面がある部分を器体上部として記載する。素材は両面加工により明らかではない。上下から尖頭器状に面的な剥離を加え、両面加工を行っている。長軸を垂直方向に置くと、その平面形態は尖頭器下半部に類似する。上下で厚みに差があり、そのため縦断面がおおよそ D 字形になる。表面に左側縁からの加撃による比較的長い剥離面がある。裏面にも同様に左側縁からの大きな剥離面があり、削片剥離面と切りあわせないが、裏面上端の成形に切られており、上端成形ののちに削片剥離が行われていることから器体を平坦にする意図が読み取れる。おそらくは上下からの剥離による既存の稜線を加撃した可能性がある。このような剥離は尖頭器の成形ではあまり見られず、この石器の大きな特徴である。器体を折り取りしたのちに、上部右側を加撃し、削片剥離により平坦面を作り出している。しかし削片剥離がやや裏面側に傾き、長軸とわずかにずれる。削片剥離後に折り取り面に細かな調整を加えているものの、細石刃剥離は行われていない。本稿では以上の加工状況や削片剥離から削片系細石刃核として扱う。高さ 44mm、幅 76mm、厚さ 23mm、重さ 64.2g を計る。



第3図 古淵B遺跡出土の細石刃核

続いて、すでに報告されている細石刃核および細石刃核原形について記載する。

第3図2は細石刃核である（報告書：第127図3）。石材は黒曜石（諏訪星ヶ台産）である。報告書では2a文化層、整理報告書：第II文化層とされている。報告書には図版掲載されているが、具体的な記載はない。やや肉厚な剥片が素材と考えられる。打面成形は上部から行われており、打面の作出は裏面から加撃されているが上半部に部分的な高まりが残る。他の細石刃核と異なり、傾斜した打面である。右側面には上部からの剥離面が連続するが、細石刃剥離面ではない。細石刃剥離面は裏面に2面確認できるが、剥離された細石刃は、小形のものであったことが推測できる。

第3図3は細石刃核である（報告書：第127図4、整理報告書第35図69）。石材は黒曜石（和田土屋橋産）である。調査報告書では2a文化層、整理報告書では第II文化層とされている。板状剥片が素材と考えられるが、詳細は不明である。正面左に部分的に原礫面が残置している。器体成形は重複する細石刃剥離面により明らかではないが、裏面の下端に下方向からの剥離と、左側縁からの剥離が確認できる。打面調整は入念に行われている。細石刃剥離の作業面は正面、右側縁、裏面に確認でき、細かな打面調整を重ねながら連続的に細石刃剥離が行われたと考えられる。右側面の打面直下および裏面下半部にステップがあることから、廃棄されたものである。

第3図4は細石刃核である（報告書：第183図4、整理報告書第35図76）。石材は黒曜石（和田土屋橋産）である。報告書では2b文化層、整理報告書では第II文化層とされている。板状剥片が素材と考えられる。裏面には原礫面が残置している。器体成形は打面から行われ、打面調整は打面左側に部分的にみられる。細石刃剥離の作業面は正面および左側縁に確認できるが、正面の中央部付近にステップが集中し、廃棄されたものと考えられる。

第3図5は細石刃核原形である（報告書：第34図1）。石材はホルンフェルスである。報告書では1a文化層、整理報告書では第II文化層とされている。器種は石核とされている。原礫面が残置する剥片を分割したもので、上下両端を折り取りによって分割し、正面からの加撃により上端部を整えている。右側縁を小口面に設定し、上部から原礫面を除去するものの、ステップが生じたため廃棄されたものと考えられる。長堀北遺跡第II文化層に類似する資料があることから、細石刃核原形と判断した。やや大振りであること、礫面が残る部分が多いことから製作初期段階の可能性がある。

4. 古淵 B 遺跡の細石刃石器群の様相

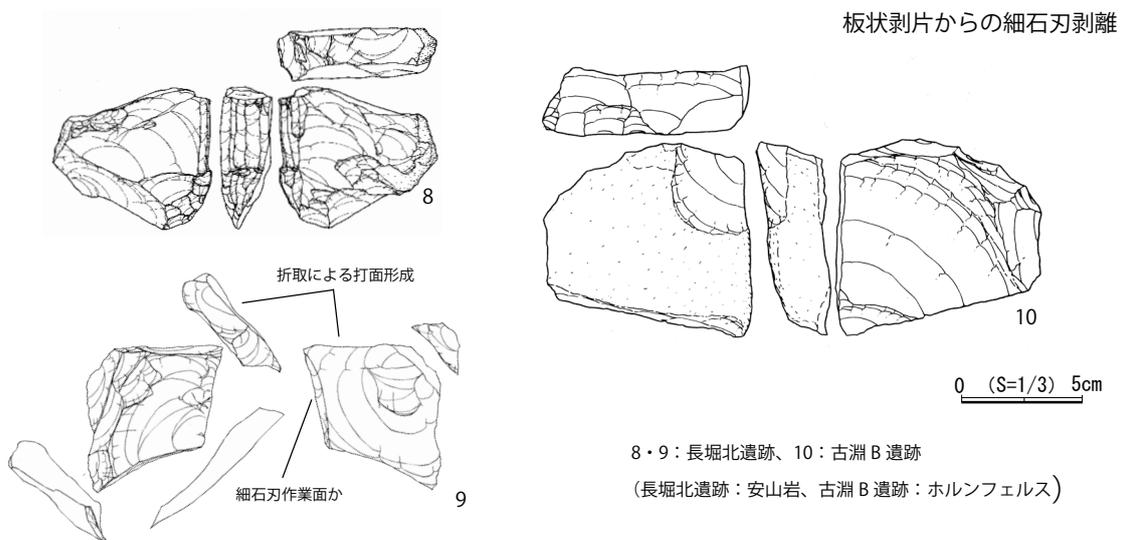
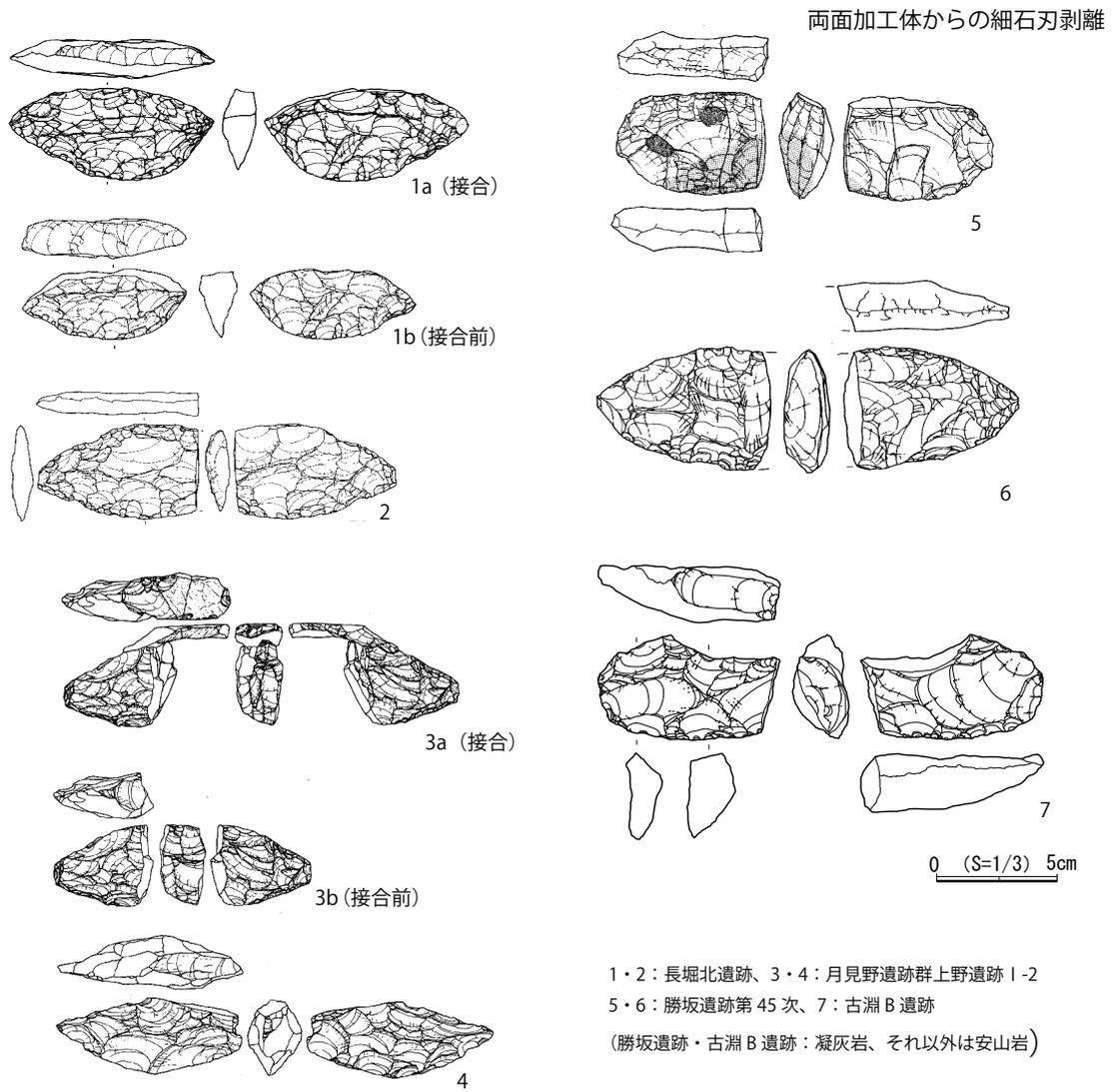
古淵 B 遺跡での細石刃石器群は、信州産黒曜石を主体とする一群と、板状剥片素材によるもの、さらに削片系細石刃核によるものに分類ができる。以下、その類例を加味しつつ考察する。

黒曜石製細石刃核の一群は、B0層上部を中心に田名塩田遺跡群 B 地区（麻生 1999）、風間遺跡群 I 文化層 (b)（麻生 1989）、当麻亀形遺跡（大坪・長澤 2002）、下溝上谷開戸遺跡（滝澤・小池 1998）などが挙げられる。いずれもいわゆる「稜柱系」である。古淵 B 遺跡のものは信州の諏訪星ヶ台産、和田土屋橋産であり、黒曜石の産地推定分析が行われた田名塩田遺跡群 B 地区（島田・長澤 2025、本研究報告に掲載）では冷山・麦草峠産と神津島産が出土している。また当麻亀形遺跡では和田土屋橋産、諏訪星ヶ台産、神津島産、下溝上谷開戸遺跡では神津島産が確認されている（望月 2007）。まとめると相模原市内においても信州産、神津島産黒曜石が認められ、遠隔地の黒曜石を使用する広域な移動領域が確認できる（望月・堤 1997）。

板状剥片素材のものは、B0層上部において、小倉原西遺跡で1点認められる（中川 2014）。良質な凝灰岩を用いたもので、板状素材を折り取り、小口面から細石刃剥離を行っている。L1S層では大保戸遺跡でも凝灰岩の板状剥片を用いた細石刃核がみられる（栗原 2013）。また、大和市長堀北遺跡第II文化層（L1S層中位）から細石刃核およびその素材が出土しており、（小池 1990・1991、長澤 2024）第4図8、9に示す。なお、9は資料実見の際に板状細石刃核の原形として判断したものであり、既存報告書では剥片として器種分類されている。管見の限りではこれら3遺跡において類例があり、B0～L1S層で確認できる。しかし細石刃核の主体的な形状ではなく、細石刃剥離の結果、稜形系となっている場合も考えられる。引き続き、類例の収集に努める。

削片系細石刃核については第4図1～7に他の遺跡の類例を示す。いずれもL1S層出土であり、市内では勝坂遺跡第45次調査（内川・高橋 1993）、市外では大和市長堀北遺跡第II文化層（小池前掲）、同月見野遺跡群上野遺跡第1地点第II文化層（相田・小池 1996）である⁽¹⁾。石材は勝坂遺跡・古淵 B 遺跡が凝灰岩、それ以外は安山岩である。古淵 B 遺跡を除き、いずれも尖頭器などが伴う。これらの類例は相模野台地に集中し、さらに細石刃石器群がいかに関わるのか、先行研究で検討が重ねられ西海技法や湧別技法の影響が想定されている。以下にその概要をまとめる。

鈴木忠司氏は月見野遺跡群上野遺跡の事例に注目し、



第4図 削片形細石刃核および板状剥片素材細石刃核の類例

北海道の峠下型細石刃核との類似を指摘した（鈴木 1988）。具体的には削片がしっかり抜けずに塗上で止まる点や、断面 D 字形である点を挙げる（第 4 図 3a、4）。

白石浩之氏は、長堀北遺跡の事例を槍先状の両面加工品を用いて打面を作出している点から、湧別技法によるものとした（白石 1993）。月見野上野遺跡第 1 地点第 II 文化層の事例は、削片が器体の長軸方向に突き抜けていない点を根拠とし湧別技法によるものとは考えずに、西海技法に同様の事例があることを指摘している。勝坂遺跡の事例は槍先状の両面加工体を分割したのちに、削片を剥ぎ取っているが、稜付きのものかどうか明らかなことから湧別技法ではなく新種の技法としての可能性を指摘した（白石前掲）。

栗島義明氏は白石氏と同様に勝坂遺跡の両面加工体を分割する事例を細石刃核の原形とした（栗島 1993）。また、断面が D 字形を呈するものがあることや、月見野遺跡群上野遺跡の事例について鈴木氏の指摘に賛同した。そして長堀北遺跡がより古相であることから湧別技法が徐々に変化していったとする。

以上の先行研究からは、湧別技法が少なからず変化したとする点が共通する。そして第 4 図 1～7 の類例を検討する中で以下の点が指摘できる。

・両面加工に差異がある：勝坂（5）は裏面に大きく剥離面が残置している。上部は削片により不明であるが、側縁が形成されていた可能性が高い。また古淵 B（7）も大きな剥離が見られ、特に裏面が平坦状になっている。この加工状況はほかの事例ではほぼ認められない。

・平面形態が対称ではない：勝坂（6）を除き、石器長軸を垂直方向に置きなおすと、左右非対称となる。長堀北（1a）は削片と接合した状態では、下部から左側縁へのラインが内湾する。これは削片剥離の際に末端まで抜け切ることを意識していると判断できる。

・断面 D 字形：栗島氏の指摘（栗島 1993）を追認する点であり、尖頭器のように両側縁から薄くするのではなく、削片剥離と細石刃剥離面の設定から意図的に厚みを残置していると考えられる。月見野上野（3a）は上部に節理面が残置しており、厚みが許容され、かつ削片が円滑に剥離できるよう、調整されている。古淵 B（7）では上端が分厚く、削片剥離のために意図的な厚みの維持があった可能性が指摘できる。長堀北（2）は尖頭器と報告されているが、資料を実見したところ、上部と下部の調整剥離や厚みの差から、削片系細石刃核の原形としても評価できよう。

ここまでの検討内容から、今回報告した古淵 B 遺跡における削片系細石刃核は、他の遺跡の類例から L1S 層に

相当する可能性が指摘できる。L1S 層は尖頭器、石斧に代表される両面加工技術が発達することから、先行研究で指摘されるように、両面加工体をベースとしつつ尖頭器と削片系細石刃核の作り分けがあった可能性がある。一方で両面加工体からどちらを意図したものか峻別できるのか、という課題がある。現時点では、両側縁の加工状況の差異が一つの基準になろう。両面体生産には厚みを除去するのか残すのか、目的とする尖頭器、細石刃に応じた石器の調整加工があったと推測する。今後、尖頭器やその未製品を改めて見直す必要がある。そして、先述した板状剥片素材による細石刃核原形の時間的な位置づけは、長堀北遺跡での共伴から古淵 B 遺跡でも共伴していた可能性が推測できる。しかし小倉原西遺跡のように B0 層段階なのかどうか判断が難しい。

おわりに

本稿では古淵 B 遺跡の追加資料を報告し、同遺跡内における細石刃石器群の様相を細石刃核から考察した。整理報告書で指摘されるように、設定された文化層から石器群の単位制を担保することは難しく、他の遺跡との比較検討も困難である。そこで今回は特徴的な資料の製作技術や、他の事例との比較検討を加えることで、一定の見解を提示した。特に相模野台地での削片系細石刃核の様相は資料数が少ないことも相まって明瞭ではない。今後も視点をもって、市内遺跡の様相を検討していく。多くの方のご批判を乞うものである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、小菅将夫氏、鈴木秋平氏より貴重なご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

注 1 月見野遺跡群上野遺跡での搔器（原報告第 100 図 48）についてその候補としても良いかもしれない。裏面に面的な剥離が皆無であり、刃部加工の様相など類例を集めた上で再度検討する。

引用・参考文献

- 相田 薫・小池 聡 1986「第 6 章 旧石器・縄文時代の調査 第 1 節 第 II 文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点』90 - 178 頁 大和市文化財調査報告書第 21 集 大和市教育委員会
- 麻生順司 1989「第三章 第 1 地区の調査 1. 第 I 文化層」『風間遺跡群発掘調査報告書』14 - 81 頁 風間遺跡法政大学多摩校地城山地区遺跡調査委員会
- 麻生順司 1993「第三章 先土器時代 第 1 節 第 1 文

- 化層』『下森鹿島遺跡発掘調査報告書(先土器時代編)』12 - 74 頁 下森鹿島遺跡調査団
- 麻生順司 1999「第IV章 B地区の調査 第1節 後期旧石器時代」『田名塩田遺跡群I 発掘調査報告書』307 - 328 頁 田名塩田遺跡群発掘調査団
- 麻生順司・相原俊夫 2021『山王平遺跡発掘調査報告書—旧石器時代編—』玉川文化財研究所
- 内川隆志・高橋真実 1993「第IV章 A地点の調査 第4節 縄文時代草創期 c 遺物」『勝坂遺跡第45次調査』28 - 50 頁 相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団
- 大坪宣雄・長澤邦夫 2002「第II章 旧石器時代の調査」『当麻亀形遺跡—相模原市都市計画道路嶽之内当麻線道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』13 - 73 頁 相模原市都市計画道路嶽之内当麻線道路改良事業地内遺跡調査団
- 金山喜昭・土井永好ほか 1984『橋本遺跡 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
- 河本雅人・川本真由美ほか 2005『古淵B遺跡旧石器時代資料再整理調査報告書』相模原市立博物館考古資料調査報告書
- 栗島義明 1993「細石器文化の終焉」『細石刃文化研究の新たな展開』II 86 - 102 頁 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 栗原好伸 2013「第5章 発見された遺構と遺物 第5節 旧石器時代、第7章 まとめ 第1節 調査の成果と課題(5)旧石器時代」『大保戸遺跡』188 - 212 頁、250 - 252 頁 かながわ考古学財団調査報告 289 かながわ考古学財団
- 小池 聡 1990『長堀北遺跡—資料編—』11 - 46 頁 大和市文化財調査報告 第39集 大和市教育委員会
- 小池 聡 1991「第5章 旧石器時代・縄文時代草創期の調査 第1節 第I文化層、第2節 第II文化層」『長堀北遺跡—本文編—』17 - 24 頁 大和市文化財調査報告 第39集 大和市教育委員会
- 小出義治・伊藤恒彦ほか 1987『中村遺跡—都市計画道理町田南大野線埋蔵文化財発掘調査報告書—』中村遺跡調査団
- 白石浩之 1993「細石器群の終末と神子柴・長者久保系石器群の関連性について」『細石刃文化研究の新たな展開』II 75 - 87 頁 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 鈴木忠司 1988「上野II文化層の評価をめぐって」『大和のあけぼのII—上和田城山遺跡・上野遺跡出土品の神奈川県指定重要文化財指定記念集—』115 - 136 頁 大和市教育委員会
- 諏訪間順 2002「相模野旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72 - 6 636 - 643 頁 岩波書店
- 関塚英一・松井泉ほか 1990『古淵B遺跡—都市計画道路古淵麻溝台線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』相模原市古淵B遺跡発掘調査団
- 滝澤 亮・小池 聡ほか 1987「第III章 A地区の調査成果 第3節 縄文時代草創期・旧石器時代の調査」『下溝上谷開戸遺跡—相模原市下溝上谷開戸土地区画整理事業地内遺跡の発掘調査—』77 - 114 頁 相模原市下溝上谷開戸遺跡発掘調査団
- 中川真人 2014「第4節 旧石器時代」『小倉原西遺跡』136 - 160 頁 相模原市埋蔵文化財調査報告 45 相模原市教育委員会
- 長澤有史 2024「縄文時代初頭の石器群について—相模野台地を中心に—」『考古学フォーラム』26 7 - 30 頁 考古学フォーラム
- 町田 洋 2009「第4章 相模川がつくった段丘の地形と地質 第2節 関東ローム層：その形成年代と環境」『相模原市史 自然編』
- 望月明彦 2007「I 相模原市域旧石器時代遺跡出土の黒曜石産地推定」『旧石器時代遺跡資料調査報告書』1 - 12 頁 相模原市史調査報告書 1 相模原市
- 望月明彦・堤 隆 1997「相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』23 1 - 36 頁 大和市役所
- 御堂島 正 2012「古淵B遺跡(N0.34遺跡)」『相模原市史考古編』151 - 155 頁 相模原市立博物館

